

持統十一年四月の霍公鳥

——弓削皇子と額田王の吉野宮贈答歌——

一 はじめに

『万葉集』巻第二、相聞部の持統朝の歌に、弓削皇子と額田王との贈答往来歌として、

幸^に吉野宮^に時弓削皇子贈^に与額田王^に歌一首
古^に爾^に戀流鳥鳴^に弓絃葉乃^に三井能上^に從^に鳴濟遊久^に

(211)

額田王奉^に和歌一首 從^に倭京^に進入^に
古^に爾^に戀良武鳥者^に霍公鳥^に蓋哉鳴之^に吾念流基騰^に

(212)

從^に吉野^に折^に取羅生松柯^に遣時額田王奉入歌一首
三吉野乃^に玉松之枝者^に彼思吉香聞^に君之御言乎^に持而加欲波久^に

(213)

という三首がある。この贈答往来の時期について再説^{注1}し、さらに、持統朝における額田王の晩年について言及してみたい。

二 贈答の時期について

この贈答の時期は、一般に、持統四・五年の頃とされているが、

川 上 富 吉

「十一年四月七日から一四日の間のこと^{注2}」とする私見について補強を
したい。

まづ、享受・研究史的に瞥見してみることにする。現行本では、

持統天皇の吉野行幸は度々あるので、いつのことかわからない。
ほととぎすの季節であるのは明らかである。(日本古典文学大系本
萬葉集。昭和32年5月)

持統天皇の吉野行幸は『日本書紀』に見えるだけでも三十一回あ
る。この歌もいつの行幸の際の歌か不明。(日本古典文学全集本萬
葉集。昭和46年1月)

持統天皇が明日香清御原にいた時の行幸らしい。藤原遷都(六九
四)以前のものと思われる。(新潮日本古典集成本萬葉集。昭和51年
11月)

とあり、全注釈書では、

四年五月か五年四月かのうちなるべし。(山田孝雄『萬葉集講義』
昭和7年6月)

歌にほととぎすが出てゐることから推して、四年五月か、五年四月
かであらうといはれている。(窪田空穂『萬葉集評釈』昭和18年6月)

年月は明かでない。(佐々木信綱『評釈萬葉集』昭和23年11月)

いずれの時なるかを知らない。不明である。(武田祐吉『万葉集全註釈』昭和32年1月)

持統紀に記すだけで卅一回の行幸があるのだから、そのいつれの時とも定めがたい。たと答の歌に霍公鳥とあるので夏の頃とは考えられる。(澤瀉久孝『萬葉集注釋』昭和33年4月)

何時のことか明らかでない。(稲岡耕二『萬葉集全注卷第二』昭和60年4月)

とあり、古注釈書類では、

四年五月、五年四月、此兩度ノ内ノ御供ニテ詠セタマフナルヘシ
(契沖『萬葉代匠記』初稿本)
いつも分きがたし。(橋千蔭『萬葉集略解』)

とあって、具体的な年月に言及したのは、契沖『代匠記』と山田講義・窪田評釈で、四年五月か、五年四月の頃とする。なお、齋藤茂吉『万葉秀歌』(昭和13年11月)は「杜鵑の啼く頃だから、持統四年五月か、五年四月であつたらう」と言っている。土屋文明『萬葉集総釈』(昭和10年3月)に、「四年五月か五年四月」とし、『萬葉集私注』(昭和24年5月)には具体的な言及はない。山本健吉『万葉秀歌鑑賞』(昭和62年3月)は「四年五月か、五年四月と思われる」としてゐる。また、六年とする説もあるが、いずれも、確たる根拠を示しているわけではない。

新潮日本古典集成本が、「藤原遷都(六九四)以前のもの」とするのは、一一二番歌の脚注「倭の京より進り入る」に着目して、

「倭の京」は、天武天皇が壬申の乱に勝って明日香入りした時、「倭京に詣る」と『書紀』に記すのと同様、明日香京であろう。

としたからである。

ちなみに、持統朝におけるホトトギスの鳴く頃―初夏、四月、五月―の吉野行幸は、『日本書紀』に拠れば、

四年五月三日 天皇、吉野宮に幸す

五年四月十六日 天皇、吉野宮に幸す。二十二日、天皇、吉野宮より至します。

六年五月十二日、吉野宮に幸す。十六日、車駕、宮に還りたまふ。

七年五月一日、吉野宮に幸す。七日、天皇、吉野宮より至します。

八年四月七日、吉野宮に幸す。十四日、天皇、吉野宮より至します。

十年四月二十八日、吉野宮に幸す。五月四日、吉野宮より至します。

十一年四月七日、吉野宮に幸す。十四日、吉野宮より至します。

の七回を数えることができる。この七回の中、四年五月か五年四月かとする根拠を、新潮集成本以外はいずれも明示されていないのである。

三 「倭京」について

一一二番歌の脚注「從倭京進入」は、『校本萬葉集』に拠れば、元暦校本、西本願寺本等に小字書入れがあるので、現行本の多くが注している。

この「倭京」について、井上通泰『萬葉集講義』(昭和3年3月)は、脚注注記がないが「藤原の都に留まれる」としている。新潮日本古典集成本は、「明日香京」であろうとしたが、すでに、武田『全註釈』が、

持統天皇の八年十二月に、明日香の清御原の宮から藤原の宮に遷居されたので、この歌は、その前後、いずれであるか不明である。よつて額田の王が、當時大和の京に居られたことは知られるが、それが何の地であつたかは不明である。大津の皇子、草壁の皇子關係の歌に次いで配列されているによれが、まだ明日香の清御原の宮に皇居のあつた頃とも考えられる。

とし、藤原京遷都以前と言っているし、『私注』も「倭京即ち明日香」としている。ただし、澤瀉『注釈』は、

「倭京」は飛鳥京か藤原京か不明であるが、後者とすれば、持統八年以後となる。前者ではなからうか。

とし「飛鳥京」か「藤原京」か不明だとしながら、「飛鳥京ではなからうか」としている。『全注』も、

「倭の京」は清御原宮か藤原宮か判断は難しいけれども、天武紀に「倭京」とあるのは明日香京のことだし、藤原遷都は持統八年十二月なので、それ以前の作とすれば明日香京を指すと考えられる。

としている。天武紀の「倭京」とは、天武天皇元年九月条に、壬申の乱記事中の、

己亥に、名張に宿りたまふ。庚子に、倭京に詣りて、嶋宮に御す。

とあるのを指しており、「近江京」に対しての「明日香古京」であること明らかである。

ところで、藤原京は、持統天皇八年十二月条に、

十二月の庚戌の朔乙卯に、藤原宮に遷り居します。

とあるが、「新益京を鎮め祭らしむ」(持統天皇五年十月二十七日条)。「新益京の路を觀す」(持統天皇六年一月十二日条)とあって、「新益京」とも言っている。このことは、明日香京を、「倭京」・「倭の古京」という、新旧の対比で考えることも可能で、「京」一字でよいところを「倭」と添えたのは、それが「新京」の「新益京・藤原京」ではなくて、「古京」の「明日香京城内」であることを示したかったからではないのだろうか。私は、明日香の古京城の意味で「倭京」とわざわざ注記したものだとして理解したい。額田王は旧京城内に住んでいたのだと推定したい。

明日香宮より藤原宮に遷居りし後に、志貴皇子の作りませる御歌

采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く(151)

と歌われたように、旧京城内に住む人は、「古」人として懐旧の対象となつたのだろうか。「古に恋ふる鳥」が「吉野の宮の山々」を鳴きながら渡って行く」先は、京(新京、藤原京)ではなく、倭京(古京、明日香京)であつたとする方が、「古に恋ふる鳥」「ほととぎす」を歌うことの必然性を納得了解できるはずである。とすれば、この作品の製作時期を、藤原遷都前とするよりも、以後とした方が妥当な推定だと言えるであろう。

四 「古に恋ふる鳥」ホトトギス

さて、齊明朝・天智朝に華々しく活躍した宮廷の才媛、額田王も、

天智天皇の「大殯の時の歌」(2、一五^{注6}) および「山科御陵より退り散くる時の歌」(2、一五^{注7}) 以後、天武朝での詠作はなく、持統朝に当面の二首があるのみである。天武・持統朝に活躍しなかったのは何故か。天武皇后持統への遠慮とする説、再婚説、その両方とする説もあるが、今は、『枕草子』の「にくきもの」に、

わが知る人にてあるほどの、はやう見し女のことほめ言ひ出だしなどするも、過ぎてほど経にたれど、なほにくし。まして、さし当りたらむこそ思ひやられる。されど、それはさしもあらぬやうもありかし。

とあるのを、天武をめぐる持統と額田との関係で、とくに勘案してみる必要があるだろうことを指摘しておくにとどめたい。とにかく、天武・持統朝では目立たないように、なかば隠棲していたと思われる。さて、「ほととぎす」については、窪田評釈が、

ほととぎすは古を戀ふ鳥だといふことは中國の傳説で、蜀王が死んでその魂からなつた鳥といわれ、古を戀うて鳴くといひ、蜀魂という文字をあててもゐる。こうした傳説が、當時の有識階級には行われて、興味をもたれてゐたのである。

とし、『全注』もまた、

額田王には、蜀魂伝説すなわち位を譲って山中に隠棲した蜀王望帝の魂魄が化してホトトギスになったという話が意識されていたかも知れない。

としているが、窪田評釈・全注に賛同したい。

東光治『萬葉動物考』(昭和10年6月)に、

蜀王本紀には蜀王の杜宇「其魄化して鳥と爲る、因りて此に名づく、亦杜鵑と曰ふ、即ち望帝也」とあり、華陽志には、「望帝位を開明に禪り、西山に升りて隠る、時に適二月、子規鳥鳴く、故に蜀人鳥鳴を悲也」など、あつて支那の詩文では時鳥の鳴き聲は悲哀の象徴であるかの如く詠まれて居る場合が多い。

とあり、『華陽志』は、『日本國見在書目録』「十四朝史家」中に、「華陽國史十二卷^{常撰}」とある。なお、諸橋轍次『大漢和辭典』の「蜀魂」の項に、『太平寰宇記』の

蜀之後主、名杜宇、號望帝、讓位鼈靈、望帝自逃、後欲復位不得、死、化爲鵑、每春月聞、晝夜悲鳴、蜀人聞之曰、我望帝魂也。

を挙げている。「讓位後、再び復位を願ったがかなわず、死んだ。そして、ほととぎすとなった」という伝説である。この『太平寰宇記』の故事にちなんで、藤原遷都後の持統朝を一覧すると、大きな出来事として、

持統十年七月十日 後皇子尊薨せましぬ。

とあり、太政大臣で後皇子尊と尊称された高市皇子が薨じた。

持統十年十月十七日 右大臣丹比真人に與、杖賜ふ。以て致事^{これをも おいてまか}ることを哀^{かな}びたまふなり。

とあり、右大臣丹比真人鳥が致仕を請うといった不安定な状態の中で、次の皇太子撰定という重大な課題が発生した。

別格的な有力皇嗣であった草壁皇子・大津皇子亡きあとの中継的実

力者であった高市皇子の死後は、長幼の順からいえば、

忍壁・磯城・舎人・長・穂積・弓削・新田部
となり、『統紀』の序列によれば、

舎人・長・穂積・弓削・新田部・忍壁・磯城
となり、授位記事からいえば、

忍壁・穂積・長・弓削・舎人・(磯城)・(新田部)

の順となるのだが、持統朝では、高市皇子・穂積皇子の厚遇が際立っており、忍壁皇子以下の諸皇子は冷遇されていたとしかみえないのであるから、天智系の志貴皇子・葛野王らはなおさらのことであつたと推定できる。

その間の事情を『懷風藻』に伝える「葛野王略伝」によれば、

高市皇子薨りて後に、皇太后王公卿士を禁中に引き、日嗣を立てむことを謀す。時に群臣各私好を挟みて、衆議紛紜なり。〔葛野王〕王子進みて奏して曰はく、「我が国家の法と爲る、神代より以来、子孫相承けて、天位を襲げり。若し兄弟相及ばざれば則ち乱此より興らむ。仰ぎて天心を論らふに、誰か能く敢へて測らむ。然すがに人事を以ちて推さば、聖嗣自然に定まれり。此の外に誰か敢へて間然せむや」といふ。弓削皇子座に在り、言ふこと有らまく欲りす。王子叱び、乃ち止まぬ。皇太后其の一言の國を定めしことを嘉みしたまふ。特閱して正四位を授け、式部卿に拜したまふ。

とあつて、衆議紛糾した時、葛野王は「嫡子孫相承」、つまり、草壁皇太子の嫡子、持統天皇の嫡孫である輕皇子を推薦したようである。その時、弓削皇子が、葛野王の言について発言しようとしたが、葛野王はこれを叱咤したので口を噤んでしまった。そこで、草壁皇太子の子であり、持統女帝の孫である、時に一四歳の輕皇子が太子に決まり、翌十一年(六九七)年二月一日立太子、八月一日には持統が讓位し、文武天皇として即位した。この皇嗣問題について弓削皇子の発

言しようとしたことはいったい何であつたか明らかでないが、おそらく、大友皇子(弘文天皇)の皇子であり、額田王の孫である「葛野王立太子を主張せんとせられたもののやうである」とする見解に従いたい。額田王に好意的同情を寄せる弓削皇子であつてこそ、吉野宮から額田王との間に「古に恋ふるほととぎす」の贈答往来歌(2・一一一〜一一三)の必然的な存在の意味が理解されるはずなのである。よつて、この贈答往来歌の時期は、持統十一年四月、

壬申に、吉野宮に幸す。己卯に、吉野より至します。

とある七日から一四日までの間と見るのが妥当な読みであることを再提言すること、後考を期して筆を擱くこととする。

注1 拙稿「弓削皇子の歌」(伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ 第二集』(昭和52年12月)後、「弓削皇子と紀皇女―皇子皇女の歌物語(一)」と改題して拙著『万葉歌人の研究』(昭和58年1月)所収。なお、近刊予定(平成5年6月)稲岡耕二編『別冊国文学・万葉集事典』中、「万葉集名歌事典」に、一一一、一一二の拙稿短文。

注2 注1に同じ

注3 尾山篤二郎「額田姫王攷」(『万葉集大成』第九卷、昭和28年6月)

注4 日本古典文学大系本『日本書紀下』頭注に、

底本は丁未。北野本・閣本に丁亥。丁未・丁亥、いずれも四月にはない。集解は丁卯十四日とする。丁亥を活かすとすれば、九月丁亥六日の誤入と考えられよう。なお還宮の日を記さないのは、三年から四年にかけての四回の行幸のほか、本年正月・九月の二回のみである。

とあるが、集解の「丁卯十四日」に従った。

注5 注1拙稿では、三年を入れて八回としたが、三年は誤まり。七回である。

注6・7 天智天皇の殯宮儀礼については、日本古典文学大系本『日本書紀下』の天智天皇十年十二月三日の崩御、十一日殯の頭注に、
陵は、万葉一五五によると当初から山科に定められたかのようにであ

るが、天武元年五月是月条に造営のための人夫徴発が見え、その後も完成しなかったのか統紀、文武三年十月条に修造の官の任命が見える。延喜諸陵式に「山科陵。〈近江大津宮御宇天智天皇。在山城国宇治郡。兆城東西十四町・南北十四町。陵戸六烟〉。陵墓要覧は所在地を京都市東山区山科御陵上御廟野町とする。なお万葉一四八―一五五に挽歌がある。

とあり、笹山晴生『従山科御陵退散之時額田王作歌』と壬申の乱」(『国文学』昭和53年4月)を参照。

注8 「栗原寺露盤銘」の、中臣連大島と比売朝臣額田について、神田秀夫『初期万葉の女王たち』(昭和44年1月)を参照。

注9 注3に同じ。